

2023. 12. 10. 主日礼拝説教  
聖書：マタイによる福音書 7章15～23節  
『教えと行い』

「実によって木を知る」(15-20)・「あなたたちのことは知らない」(21-23)という具合に本日の箇所は二つに区切られています。前半はルカ6章に、後半は同13章に並行箇所として収録されています。マタイはこの二つを隣接して記します。それは偽善者に対する警戒が全体を貫くテーマだからです。

15-20節では、マタイはQ資料から得た木と実の比喩を描きます。もともとQには文字通り木と実の話そのものが書かれていただけだったのですが、マタイはそれを大きく改変し、読者の受ける印象を強くしつつ、当時の初代教会内部に色濃くすぶっていた問題に適用しています。

まずマタイはオリジナルである15節の「偽預言者」という強烈な描き出しで広く注意を促します。この時点で木と実の伝承は単なる比喩の材料に用いられて行きます。マタイにおいて「羊」とはキリスト者を意味しますから、羊の皮をかぶった偽預言者とは初代教会内部の者なのです。その正体は羊を食い荒らす狼であることが暴露されます。同じ論法で、続く17-18節では木と実の関係を肯定文と否定文を交差させながら技巧的に仕上げられています。そしてこの後19節では、悪い木には容赦のない処分が述べられます。これは3章10節で、洗礼者ヨハネが終末の裁きを語りつつ悔い改めを迫った時の言葉をそのまま流用しています。そして、20節で神の最期の裁きから現在を見直し、教会内の者に向かって木をしっかりと識別すること、さらに彼ら自身が良い実を結ぶ良い木であることを勧めてゆくのです。ちなみに「火」とは「木」に対しての滅びのイメージです。

さて、それでは「偽預言者」とは誰のことかという問いが21-23節で展開されてゆきます。マタイの時代、初代教会内には実際にこのような「偽預言者」騒動が繰り返し持ち上がりました。問題は深刻だったことが想像されます。

「偽預言者」は模範的な信仰を表明し(21)、さまざまな行為を行う者(21)と記

されているくらいですから、教会内で相当の影響を持つ者だったのでしょう。しかし彼らは断罪されるのです。なぜなら「不法を働く者ども」(23)だったからです。「不法」とは律法否定を意味しました。マタイにとって律法否定は愛の否定なのです。律法の本質は「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」という愛の戒めなのです。それゆえ律法は今なお有効であるとマタイは考えたのです。つまり、たとえ信仰を持ち、数々の良い行いを得たとしても、愛がなければ滅びるべき存在であると語るのです。

罪を犯さない人間は存在しません。わたしたちは多かれ少なかれ罪を犯さずには生きてゆけないのです。だからといって罪を犯すことにあぐらをかき、当然のこととするのは人間ではないのでしょうか。この罪を犯さない状態と罪を当然とする状態。この二つの偏りの間を行ったり来たりしている状態が人間に与えられた現実なのかと思います。この不安定に思える揺らぎの中にあって、耐えながら、もがきつつ生きることこそが人の人たる証しではなかったでしょうか。マタイはその揺らぎを「教えと行い」とであると説くのです。どちらかに偏ってしまえば、人は信仰を自己陶醉の場に変換するか、または私利私欲を求めてけだもののように生きるかしかないのです。教えと行いの狭間に愛があるのです。